

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：37402

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820026

研究課題名(和文)戦後の中国文学における知識人の接触と台湾モダニズム文学生成の関係性の解明

研究課題名(英文)An Analysis of Intellectual Connections and the Formation of Taiwanese Modernism in Post-War Chinese Literature

研究代表者

小笠原 淳 (OGASAWARA, Jun)

熊本学園大学・外国語学部・講師

研究者番号：70634137

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：一九四〇年代から九〇年代に至る台湾におけるモダニズム文学の生成を、五〇年代の『文學雑誌』と『現代文學』の精読を通して明らかにした。夏濟安によって台湾にもたらされたモダニズムの系譜を再考し、夏と中国の現代詩人卞之琳との交友関係を繙いて、『文學雑誌』に見られるモダニズム詩への傾倒が、中国の現代派詩人と密接に関係していることを明らかにした。

『現代文學』の影響を受けた作家舞鶴を考察する過程で、日本統治期台湾の作家坂口れい子に注目し、彼女の「蕃地」をめぐる創作テーマ及び台湾作家との接触について調査研究を進め、坂口が台湾作家のみならず霧社事件の生存者とも接触していた事実を新資料によって明らかにした。

研究成果の概要(英文)： From the 1940s to the 1990s, Taiwan's modernist literature underwent developments and vast changes. To investigate this process, this paper makes a close reading of Wenxue Zazhi and Xiandai Wenxue, two literature journals from 50s Taiwan, offering a rethinking of the contexts and development of the modernism that was introduced to Taiwan by Xia Ji'an. Through this research I have found that the fascination for modernist poetry seen in Wenxue Zazhi is closely connected to the relationship between Xia and the Chinese poet Bian Zhilin.

Furthermore, while studying the writer Wu He, who has greatly influenced by Xiandai Wenxue, I have opened up new research into the exchanges between Sakaguchi Reiko, a writer from the Japanese colonial period, and Taiwanese writers, as well as the Taiwanese indigenous areas that are a focus of her fiction. Through newly discovered sources, I have proven that Sakaguchi was in close contact with Taiwanese writers and the survivors of the Wushe Incident.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・中国文学

キーワード：台湾文学 中国文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、代表者の研究実績である「台湾現代小説における「モダニズム」の展開 白先勇のエクリチュールの変遷をめぐって」(博士論文、2012)や「『文學雑誌』と『現代文學』 二誌を通して見る五、六〇年代台湾文学のモダニズム意識」(2010)を研究背景として着想された。

(2) 戦後の台湾モダニズム文学の歩みは、夏濟安の雑誌『文學雑誌』から始まり、白先勇が創刊した『現代文學』に受け継がれ、一九六〇年代にはモダニズム文学運動が興って、新人によって盛んな文学創作がおこなわれ、今日の台湾文学の基盤が整えられた。このように一九四〇年代から一九九〇年代にかけて大きな変革もたらされた台湾における(モダニズム)文学の生成過程を、三〇年代中国と台湾の知識人や作家たちの接触という角度から論究し、解明しようとするのが本研究開始当初の狙いであり、研究動機である。

2. 研究の目的

(1) 一九五〇年代、中華民国期中国の外文系知識人夏濟安が台湾大学に赴任し、『文學雑誌』を創刊してモダニズム文学の普及に力を注いだ。夏濟安の精神は白先勇や王文興ら台湾大学外文系の学生が創刊した同人誌『現代文學』によって引き継がれ、六〇年代台湾でモダニズム文学の運動が興る。

戦後の台湾文学は大陸と断絶した運動だと考えられてきたが、モダニズム文学に限れば、四〇年代中国文学との共振として捉えられないか。本研究の目的は、こうした問題意識に立って、戦前戦後の中国文学における知識人の接触が台湾文学に与えた影響を考察し、台湾文学及び台湾モダニズム文学の生成過程の解明を目指すものである。

(2) 一九四〇年代から九〇年代に至る台湾文学におけるモダニズムの生成と変遷を考察する。夏濟安、白先勇、王文興などの外省出身の知識人と作家を中心に形成された学院派及び「現代文学」派の創作の一部は、八、九〇年代の戒嚴令解除前後に現われた「本土派モダニズム」作家の舞鶴に引き継がれたと考えられる。しかし本省人作家の舞鶴は、オーセンティックな「中国人」として外省人二世の白先勇が創作したような、一九三〇、四〇年代中国への懐郷とディアスポラのテーマ性は持たず、遡及すれば楊逵や呂赫若、坂口禰子といった日本統治時代の台湾リアリズム作家が描いたテーマを継承しているようだ。たとえば舞鶴の創作には呂の「風水」や坂口の「霧社」といった共通のテーマが看取される。こうした認識に立ち、一九四〇年代日本統治時代の坂口禰子の文学テーマや台湾人作家との接触を視野に入れて台湾文学の生成を考察する。

3. 研究の方法

(1) 『文學雑誌』と『現代文學』の小説テキストを対象に作品の精読を進め、台湾モダニズム小説のスタイルと内容の関係性の把握に努める。国立台湾大学や国立台湾図書館、国立台湾文学館などで当時の小説テキストなどの一次資料、評論などの二次資料を幅広く収集し、収集した資料をもとにテキストの分析と情報の解析を行う。研究課題に対応する柯慶明教授や黄美娥教授ら台湾の研究者や研究対象の白先勇らの作家と接触し、最新の研究動向と同研究課題に関する情報の提供を求める。

(2) 紀弦の『現代詩』(1953)や痲弦の『創世紀』(1954)、『自由中国』文芸欄(1949~1960)と夏濟安の『文學雑誌』(1956~60)そして『文星』(1957~65)等の五〇年代の文芸誌がどのような横と縦の繋がりを有していたのかという問題を、知識人の接触と小説テキストの精読を通じて明らかにさせる。このような基礎研究を踏まえた上で、夏濟安の『文學雑誌』と白先勇の『現代文學』が創出した五〇~六〇年代の台湾モダニズム文学テキストの分析を進め、台湾モダニズム文学の生成過程を三、四〇年代中国文学からの連続性のなかで解明する。

(3) 国内及び台湾で収集した日本統治期及び戦後の台湾文学資料をもとにテキスト分析と情報の解析、知識人と作家の接触を精査し、学会やシンポジウム、研究会で研究成果を発表する。

4. 研究成果

(1) 本研究に資する一次資料及び二次資料を国内外で積極的に収集した。この資料をもとに、『文學雑誌』と『現代文學』を中心とした五〇~六〇年代の文芸誌掲載の小説テキストの精読を進め、小説スタイルに関する分析を行い、その研究成果を『戦後台湾小説的現代性叙述脈略 論白先勇的書写変遷』(2013年3月)として発表した。本稿は、戦後の台湾小説のモダニズム的叙述の変遷と発展を、夏濟安、白先勇、王文興、王禎和の文学創作の比較を通じて検討したものである。

まず夏濟安によって台湾にもたらされた「現代文学」(モダニズム文学)の系譜を辿ることから始めた。一九五〇年代の台湾で『文學雑誌』を発刊した夏濟安と一九三〇年代中国の現代詩人卞之琳の交友関係を夏の日記『夏濟安日記』の叙事を通して実証し、夏のエリオット『荒地』に見られるモダニズム詩に対する傾倒が、卞ら三〇、四〇年代中国の現代派詩人との交友と密接に関係している点に論究した。さらに、この中国現代派詩の流れは、夏自身と夏が50年代後半の台湾で発刊した『文學雑誌』で発揮され、その後六〇年代には台湾の新進の作家白先勇や

王文興、詩人葉維廉らに継承されていくという、戦後台湾モダニズム生成の一連の変遷を明らかにした。

六〇年代の台湾に現われた欧陽子、白先勇、王文興、王禎和などの台湾大学出身の新人作家が、五〇年代後半に夏から西洋の文学理論を学ぶ中でテキストの精読を実践し、西洋文学を中国語に翻訳し、同時に夏から推薦され『文學雑誌』に創作を開始していく。このように、夏の強い影響と西洋文学の翻訳の傍らで創作を始めた六〇年代に出現した新人作家欧陽子、白先勇、王文興、葉維廉と『文學雑誌』との関係性を作家の自伝的な叙事を通して論証した。

六〇年代の雑誌『現代文學』で本格的な創作を開始した新しい世代のモダニズム作家たちの作品の中に表れる「意識の流れ」の用法の一変遷を白先勇、王文興、陳若曦、王禎和の小説テキストの比較分析を通じて明らかにし、更に戦後台湾文学におけるモダニズム的叙述が九〇年代の作家舞鶴に受け継がれてゆく変遷を考察した。

(2) 白先勇の長編小説『孽子』(1977-81)における台北の都市形象を、台北の新公園、西門町、南機場のスラム街の戦中戦後史を辿りながら比較文学的に考察し、「白先勇『孽子』と台北 移ろいゆく都市の記憶」(2013)として公刊した。これまでの先行研究では、白先勇の文学におけるノスタルジア、エスニック・アイデンティティ、セクシュアリティに着目したものが主流だったが、本研究では、「空間・地縁・歴史・記憶によって織りなされる」テキストの空間性に光をあてて、『孽子』と台北の都市空間やそこに宿る土地の記憶の結びつきを考察し、『孽子』における「空間」役割について検討した。この三つの空間を軸に『孽子』を論じることで、白先勇の文学研究に新たな視座をもたらしたことが考えられる。

(3) 白先勇や王文興、王禎和ら六〇年代の「現代文學」派の系譜として捉え得るのが、戒嚴令解除前後に現われた本土派モダニズム作家の舞鶴である。この「現代文學」派の流れを汲む作家として舞鶴の創作に注目し、「舞鶴 拾骨 與大江健三郎 死者的傲氣 中死者意象之比較研究」(2012年6月)及び「死者と母の郷土表象 舞鶴「拾骨」論」(2012年8月)を発表した。本稿は主に舞鶴の中編小説「拾骨」における母と郷土の表象について考察したもので、国内では初めて舞鶴の文学を正面から論じたものである。

(4) 2013年度からは四〇年代日本統治期に発刊された文芸誌『臺灣文學』で活躍した坂口禰子、楊逵、呂赫若らに関連する諸作品、資料を収集し、特に坂口とその周囲の知識人との交友関係や「接触」に主眼を置いて研究を進めた。坂口は戦中戦後を通じて楊逵や呂

赫若、張文環ら台湾人作家と交流があった。したがって、坂口を焦点とすることで、従来とは異なる視点から台湾文学の生成を明らかにすることができる考えた。また、舞鶴の創作テーマは遡及すれば楊逵や呂赫若、坂口禰子といった日本統治時代のリアリズム作家が描いたテーマを継承していることが分かってきた。

これに関する研究成果として、坂口と台湾文学に関する新しい資料の発見を挙げることができる。この新資料によって坂口が楊逵や呂、張文環、楊千鶴といった台湾作家、オビン・タダオ、ピポ・ワリス、下山一などの霧社事件の生存者、また矢野峰人、工藤好美ら日本の知識人らと交友し接触した足跡の一部が明らかになってきた。今後はここで得た坂口の交友関係と「接触」状況を整理し、公刊していくつもりである。

ここで得られた研究内容の一部は評論「坂口禰子の半生」(2013年11月)及び「坂口禰子小説中的台湾霧社意象 时钟草 至 番地 的书写变迁」(2014年1月)で発表した。また、国際シンポジウム及び学会において、研究の進捗に応じて本研究成果を公表してきた。

「移動」が生み出す語り - 坂口禰子の熊本時代から戦後創作まで」(日本現代中国学会、2013年10月26日)では、「移動」によって変化していく坂口の語りの質の違いを強調し、「植民地台湾の傷跡 坂口禰子の「時計草」と「蕃地」を読む」(若手研究者支援シンポジウム、2014年3月29日)では坂口が得意とした「蕃地」シリーズにおける人物モチーフの諸問題を考察した。また、坂口の未公開写真や戦後の未発表原稿等も公開した。

(4)に関する主な研究成果は以下の三点である。

坂口の台中及び「蕃地」経験を現地調査や新資料を通じて辿りなおし、作家の足取りを明らかにすることができた。(ここでのより具体的な内容は今後論文として公刊していく)

本研究によって「蕃地」シリーズのモチーフになった人物やテーマが絞り込まれ、今後同テーマをめぐって戦後の台湾文学と比較する際の素地が整った。

一九四〇年代台湾文壇における日本人作家と台湾作家、日本知識人との交流状況の一端が明らかになってきた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

小笠原淳、坂口禰子小説中的台湾霧社意象 时钟草 至 番地 的书写变迁、「聚散离合的文学时代」論文集、査読なし、2014、96-101

小笠原淳、坂口禰子の半生、熊本日新
聞第 25758、25759、25760(11月15、16、
17日)2013、17面,22面,24面

小笠原淳、死者と母の郷土表象 舞鶴
「拾骨」論、査読有、『野草』第90号、2012
年、1-19

小笠原淳、舞鶴 拾骨 與大江健三郎 死
者的傲氣 中死者意象之比較研究、『中正
漢學研究』第1期、査読有、2012、193-210

〔学会発表〕(計 5件)

小笠原淳、植民地台湾の傷跡 坂口禰
子の「時計草」と「蕃地」を読む、2013年度
若手研究者支援シンポジウム『災厄とトラウ
マ』、2014年3月29日、神戸大学

小笠原淳、坂口禰子小説中の台湾霧社意
象 时钟草 至 番地 的书写变迁、
聚散离合的文学时代(1937-1952)国际学术
研讨会、2014年1月11日、北京大学

小笠原淳、「移動」が生み出す語り - 坂
口禰子の熊本時代から戦後創作まで、日本現
代中国学会第63回全国学術大会、2013年10
月26日、福岡大学

小笠原淳、家庭と郷愁のはざままで - 坂口
禰子一九四〇年代テキストの再読、名古屋シ
ンポジウム 分裂の物語・分裂する物語 - 大
分裂時代の叙事 - 大陸・台湾・香港・馬來半
島、2013年8月3日、愛知大学車道校舎コン
ベンションホール

小笠原淳、試論戦後台湾文學中的現代主
義敘述特徴—《現代文學》與舞鶴作品的敘述
脈絡、ITP Colloquium 東亞的域外體驗與文化
接觸 由語言探討日本與台灣以及中國大陸
的文化往來、2012年12月21日、国立台湾
大学

〔図書〕(計 2件)

小笠原淳、戦後台湾小説的現代性敘述脈
絡 論白先勇的書写变遷、神戸大学人文
学研究叢書、2013、58

小笠原淳、「孽子」と台北——移ろいゆ
く都市の記憶(291-317)、勉誠出版、緒形
康編『アジア・ディアスポラと植民地近代
歴史・文学・思想を架橋する』所収、
2013、324

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小笠原 淳 (OGASAWARA Jun)

熊本学園大学・外国語学部・講師

研究者番号：70634137